論文 1

個別奨励研究助成報告

昭和10年代における魯迅受容
——追悼言説と『大魯迅全集』を中心に

松本　和也

1. はじめに

魯迅（本名＝周樹人、1881〜1936）は、日本近代文学（史）にとって欠かせない文学者の一人であるばかりでなく、《外国文学者としての魯迅は、日本において大変ポピュラーな存在》[1] でもある。魯迅の日本受容は重要な研究テーマであり、すでに丸山昇らによる示唆的な先行研究がある[2]。そうした研究をふまえつつも、本稿では研究の薄い昭和10年代に時期を絞り、日本での魯迅受容に注目していく[3]。こうした問題領域の重要性は、小田嶽夫『魯迅伝』（筑摩書房、昭16）の次の一節によく示されている。

> 魯迅は一九三六年十月に死んでゐる。この彼の死んだ年の一九三六年以前と、翌年の一九三七年以後とでは支那の歴史に画然とした色分けがつく。即ち支那事変以前と以後である。魯迅が生きてゐて事変に遭遇したなら如何の感想を抱いたかは軽々に判断を許されない。そして私は魯迅が事変の前夜に死んだ事に自分の感傷から無理にも何か意味をつけて考へたがるのである。——事変が支那民族にとつても曙となるならば、魯迅は暗黒のさ中に死んだ事になるし、それがより悪い状態を持ち来すならばせめても魯迅は救はれた事になる。若し又支那がかういふ大事変の洗礼の後にも尚本体を改めず、旧態依然を続けるならば魯迅は空しく徒労を続けたことになる。（28頁、傍点原文）

してみれば、昭和11年に死んだ魯迅にとって昭和10年代とは、ほとんどが死後の期間であり、逝去の翌年には日中戦争が開戦したことになる。したがって、この期間における日本での魯迅受容を検証する作業は、敵国の文学者となった魯迅が、日本でどのように読まれたかを問い直す作業ともなる。

もとより、日本において魯迅は、昭和初年代から大きな注目を集めていた文学者である。本間久雄「書斎偶語【上】魯迅のこと」（『東京朝日新聞』昭7・4・9）には、次の一節が読まれる。

> 支那の文学者魯迅が、この頃、切りに紹介されてゐる、正月の「中央公論」では、その作「故郷」が佐藤春夫氏によつて翻訳され、同じく正月の「書物展望」には伊藤貴麿氏の小説家としての魯迅についての評論があり、この四月の「改造」には増田渉氏の「魯迅伝」といふ長篇の評論が載つてゐるし、私は、まだ読まないが、その傑作「阿Q正伝」も、すでに翻訳出版されてゐるさうだ。（9面）

こうしたムーブメントの中、井上紅梅訳『魯迅全集（全1巻）』（改造社、昭7）も刊行され、広告「改造社　魯迅全集」（『読売新聞』昭7・11・23）には、《現代中華文壇第一人者の全労作出づ》というコピーにつづき、次のような紹介文が付されることになる。

> 魯迅、周樹人！　夙に日本に遊び、少壮白話体を提唱して「狂人日記」一篇に中国新文学の典型を示し、「阿Q正伝」によつて世界的不朽の文名を確保した魯迅！　彼は中華民国の漱石と称せられ、ロマン・ローランは東洋一の芸術家とも評した。彼の芸術は、吾等が最大の関心を持つ隣邦中国の伝説を、風俗を、慣習を、思想を、生活を、特異の観察と形式とを以て吾等の前に展開する。此一巻を繙かずして新しき支那を云為することは不可能だ。（1面）

1　藤井省三『魯迅事典』（三省堂、平14）、286頁。

2　丸山昇『魯迅・文学・歴史』（汲古書院、平16）ほか参照。

3　このテーマについて、すでに拙論「昭和一〇年代における魯迅受容一面——佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫——」（『立教大学日本文学』平22・7）、「小田嶽夫『魯迅伝』の本文異同」（『ゲストハウス』平23・4）、「小田嶽夫『魯迅伝』の形成と変容（一九四〇〜一九六六）」（『立教大学日本文学』平23・7）で一部論じた。本稿は、それらの遺漏を補うものでもある。

こうした素地の上に、佐藤春夫・増田渉訳『魯迅選集』（岩波文庫、昭 10）が刊行され、代表作にくわえて巻末に付された増田渉「魯迅伝」によって、その人となりも、広く日本に紹介されていくことになる。実際、《近刊の「魯迅選集」によつて、「孔乙己」や「阿 Q 正伝」などを読んだ》という「一日一題　モラエスと魯迅」（『読売新聞』昭 10・7・20 夕）の正宗白鳥は、《支那の現実の一面が可成り深刻に、可成り巧に描写されてゐるのに感心した》（1 面）という感想をもらしている。また、前後しては、長與善郎「魯迅に会つた夜」（『経済往来』昭 10・7）も発表される。同文は、烏丸求女「壁評論　魯迅の影や侘し」（『読売新聞』昭 10・7・13）にとりあげられ、《最近の魯迅の姿が髣髴としてゐた》、《いゝ読物の一つだらう》と評されたことにくわえ、《縁の遠いフエルナンデスなんかよりも、魯迅にこそ、「政治と文学」の問題について、なま／＼しい感想を叩いて見たい》（10 面）と、文学的所感を聞きたい縁近い文学者として、魯迅の名前があげられてもいた。あるいは、中村光夫は「魯迅と二葉亭」（『文学界』昭 11・6）において、《二葉亭が我国における言文一致体の創始者であるごとく、魯迅は支那において白話体小説をはじめて文章にまで引き上げた人》（148 頁）だと両者を紹介した上で、《おなじく数百年にわたる封建制度の遺習たる根強い伝統的文化の重圧をうけながら、そこにはじめて近代文学を生みだすことを強ひられた二人の文学的事業になにかたんなる表面的な比較では尽しがたい共通の不幸を感じる》（149 頁）として、近代文学創始者の苦しみを論じていた。

ただし、日本において本格的な魯迅受容が進んでいくのは、《魯迅は死すると共に今度は見えざる方面において非常に多くの日本人に、より深い交渉を持つ様になつたと私は思ふ》（364 頁）と内山完造が「魯迅と日本」（『アジア問題講座第十一巻　思想・文化篇（二）』創元社、昭 14）で述べたように、魯迅の死を契機とする。次節からは、魯迅の死後、昭和 11 年以降における魯迅受容を検討していく。

2. 魯迅追悼言説

昭和 11 年 10 月 19 日の魯迅の死は、日本でも新聞各紙で報じられる。ここでは、無署名「魯迅氏逝く　支那文壇の巨匠」（『東京朝日新聞』昭 11・10・20 夕）から、その全文を次に引く。

> 【上海特電十九日発】現代支那の文豪で「支那のゴルキー」と呼ばれてゐた有名な小説家魯迅事周樹人は宿痾の喘息のため近年健康を害してゐたが数日前より突如病勢募り十九日午前五時二十五分上海施高塔路大陸新村の自宅で心臓性喘息で急逝した、享年五十六／同氏は人道主義的な作家で「阿 Q 正伝」「吶喊」「彷徨」などの代表作があり口語体小説の先鞭をつけた功労者である、五六年前に、中国左翼作家聯盟に入つて一時南京政府より睨まれたこと等もあるが最近は病弱なため短い随筆風のものを書く外殆ど執筆せず質素な生活を送つてゐた魯氏は現代支那文学の父として支那において尊敬されてゐたばかりでなくその作品は広く海外に紹介され我国においても文壇人その他に知友多く魯迅氏の死は現代支那文学界の大きな損失として惜まれて居る（2 面）

この記事には山本実彦氏談「惜しい人を」も添えられ、そこで山本は《惜しい人を亡くしました》と魯迅の死を悼みつつ、《一言で云へば偉大なインターナシヨナリスト》（2 面）だと紹介してもいた。その山本は長文の追悼文「魯迅の死【上・下】」（『東京日日新聞』昭 11・10・21、22）も書いている。《恵まれざる国家に生れ、恵まれざる生活に終始しその間に平然として所信に生きた彼は尊かつた》と魯迅の生き方を絶賛する山本は「魯迅の死【上】」で、《一貫して働きかけた核心は儒教の桎梏から支那民族を解放するのにあつた》（21 日、7 面）と、魯迅思想のエッセンスをとりだしてもいた。

同紙には、佐藤春夫氏談「魯迅の横顔　その生々しい警句」（『東京朝日新聞』昭 11・10・20）も掲載され、長文の人物・作品紹介につづき、次のような評価までが示されている。

> 魯迅の芸術は、流石に支那小説史の権威ある学者だけに、よく支那文学の伝統を受けついでゐる。その伝統と西欧文学との融合が、魯迅の芸術の特色であると私は思つてゐる。「阿 Q 正伝」は代表作だが、私の訳した「故郷」と「孤独者」も好短篇であると思ふ。私は近く彼を弔ふ意味でその随筆的自叙伝「朝花夕集」を翻訳して見たいと思つてゐる。（7 面）

また、室伏高信は「魯迅の印象【上】」（『読売新聞』昭 11・10・20）において、《魯迅その人の風貌

については、いまも尚ほはつきりと印象のうちにとり入れてゐる》（5 面）と、面会の記憶を蘇らせつつ、つづく「魯迅の印象【下】彼の人物の魅力」（『読売新聞』昭 11・10・21）では人物評価に及ぶ。《魯迅が今日の中国の青年や文化人たちに崇拝されてゐるのは、多分に彼が左翼理論を理解し、もしくはこれに同情をもつてのゆゑであらうことはもちろん》だと前提する室伏は、《彼の風貌のうちに、作品の魂のうちに、老荘的虚無主義が宿命のやうにしてにじみこんでゐることは疑ひないこと》だと断じて、《私は魯迅の死を聞いてこの人を老子や孔子のやうに長生きさせたかつたといふ哀惜の情にたへないものがある》（5 面）と、その死を悼みつつ、長生きした後の思想展開に思いを馳せる。

さらに、山東賦夫「壁評論　魯迅とわが文壇」（『読売新聞』昭 11･10･22）では、《ひとたび彼〔魯迅〕を知つたこの国の文壇は、その作品の骨を刺すやうな真実味に動かされた》と日本における魯迅受容のインパクトが強調される。《魯迅によつて与へられたこの感動が、どれだけ深くこの国の文学者の血肉に浸込んだか、それは疑問としても、魯迅の発見は確かにこの国の文学者にとつては、素晴らしい支那近代文学の発見であつた》と総括する同論では、次のように魯迅の普遍性が称揚されていく。

> 日支の政治的関係がどうあらうと、さういふ政治的なものを越えて、人間と人間と、精神と精神との触れ合ひ抱き合ふ世界がある。それは即ち文学芸術の世界だ。魯迅の死を悼む情を支那近代文学を通じて支那の人間を知る欲求へと移したいものだ。この一二年来、魯迅の消息がいろいろな人によつて、相当細かくわが文壇に紹介されてゐたが、あの悩める不屈の魂を想ふと、満目暗澹たる中にも、何かほのぼのとした精神の福音に接する思ひがされる。（5 面）

また、魯迅の訃報に《何よりも先づ衝撃を感じ、ふかい寂寥にとらはれた》（14 頁）という伊藤信吉は「魯迅に就ての感想（一）」（『コギト』昭 12・3）で、その死の意義を次のように述べている。

> 支那的現実の暗さがこの作家の生涯を寂寥にみちびいたとすれば、私の寂寥は魯迅その人の内部から流れてきてゐるのである。〔略〕あの豊かな風貌に翳した色をさがして、私はどこまでもこの作家の死を寂寥せねばならぬと思ふ。ここに現代支那の社会的現実が窺はれるとともに、暗い時代に於ける誠実な意思ならびにヒユーマニズムの実践性が一つの形に於て測られるからである。（15 頁）

死後、いよいよあらわになる魯迅の人気（幅広い支持層）に関わっては、頼生「魯迅の遺言　空想文学家を戒む」（『東京朝日新聞』昭 11・10・29）が、次のように魯迅の葬儀の様相を伝えている。

> 会葬者六千余人。この中には思想的に国民政府から注意されてゐる人も多く、親交ある内山完造氏（彼は二十余年も上海にゐる本屋さんで「老上海」の称がある）の会葬は珍しくないが、ソヴエトの対外文化協会、エスペラント協会、ラテン文字学会等の代表者並にその花環、聯等は衆目をひいた。（16 面）

ほかにも、無署名「魯迅の死」（『セルパン』昭 11・12）が中国での報道をまとめて紹介していたが、日本の月刊誌でも、昭和 11 年 12 月号から魯迅追悼特集が組まれる。

その第一は、「魯迅悼惜」（『改造』昭 11・12）である。この特集の掲載号には、山本實彦自ら「魯迅の或る心の歴史」を書いており、また、同誌の無署名「編輯だより」には次の一節が読まれる。

> ○十月十九日、中国文学界の巨匠魯迅氏の訃報が伝はつた。故人の偉大なる作業はいまさら喋々するまでもない。本誌はこゝに、氏の遺稿ならびに故人に親炎せる人士の追悼の文章を聚め、故人を悼み、惜しむよすがとした。読者諸氏の心して読まれんことを希ふ。（128 頁）

特集には、魯迅「深夜に誌す」のほか、内山完造「魯迅先生追憶」、胡風「悲痛なる告別」、中西均一「魯迅先生語録」、林守仁「魯迅の死と広東の想出」、増田渉「魯迅書簡集」が並ぶ。内山完造は「魯迅先生追憶」において、《先生〔魯迅〕はタヾ一個の文芸家にあらず又一文学者にもあらず、一思想家にもあらず、先生は実に五億万極東二大民族に対して其行路を指示する処の一大預言者であつた》（111 頁）と、その偉大な人物像を描きだす。胡風／鹿地亘訳「悲痛なる告別」では、《魯迅先生は、祖国の自由と進歩とのために一生を戦ひ通した偉大な先駆者であり、害を被り侮辱を受けた者の詩人であり、永久に疲労も屈服も知らなかつた戦士であり、赤誠の同志であつた》（112 頁）と、やはりその相貌の多面性にふれた上で、次のようにして魯迅への哀悼を、同志に向けたエールへと転じていく。

> 友人等よ、兄弟妹姉等よ、我等の愛心、我等の悲痛、我等の仇恨を一つに溶合した偉力によつて、

遠からぬ将来に、先生の理想を祖国の大地の上に万花の乱れ咲くやうに実現させませう。その時に我等は両び先生を哀悼する涙の中に、狂ほしくも熟した意気を混交させることとなるのです。(118頁)

また、「魯迅先生語録」の翻訳を担当した中西均一は、《簡潔な文章の中に魯迅は中国社会の病患部を剔抉して余すところがない》、《否、それは中国社会のみが対象ではない》、《魯迅の言葉には地理的制限はない》(115頁)と、魯迅の言葉が中国にとどまらない普遍性をもつことを強調した。林守仁「魯迅の死と広東の想出」でも、《上海人は、中国人は、そして中国の文壇はポックリ死なれてみて始めて魯迅の如何に偉大な存在であつたかに今更ながら吃驚した様である》(119頁)と、死の衝撃が語られ、さらには、その死が世界中の人々に惜しまれたさまを、《世界の人から彼がどんなに愛されたか、その急死が一度世界中に報ぜらるると共に各国各方面からの弔客弔電弔辞が殺到した》(120〜121頁)と伝えている。

この特集に論及したのは、「槍騎兵　改造(十二月号)」(『東京朝日新聞』昭11・11・29)の小林秀雄である。《魯迅の死には哀惜の念なきを得ぬ》、《こゝに載せられた諸氏の文章を平静に読める人はないであらう》という小林は、《この遠い国の一文士の死の方が眼の前の軍部案のいざこざなどよりも心に沁みる》、《支那も前衛文士には事を欠かぬだらうが、古い支那に精通し而も新しい支那の先頭が切れる様な文学者は、この乱世には再び容易に得る事が出来まい》(7面)と、稀有な文学者の死を悼んでいる。

特集の第二は、「魯迅追悼」(『文芸』昭11・12)である。同誌の無署名「編輯室」に次の一節がある。

現代支那のとぼしびであり廿世紀東洋が産んだ世界的な文豪・魯迅氏が卒然として泉路に就いた。惆悵に堪えず。生前、本誌との関係の深かつたことは読者諸氏も御承知の通りである。彼の近作二篇に故人に関する印象記を併せて特輯した。(275頁、傍点原文)

同誌には、魯迅の著作として、池田幸子訳「死」と鹿地亘・日高清磨瑳訳「中国文学運動に於ける統一戦線の問題」が掲載されたほか、木村毅「瞥見の魯迅さんとショウ翁」、池田幸子「最後の日の魯迅」が並ぶ。《日本のジヤーナリズムに魯迅さんの名を紹介したのは、私が、或は最初ではないか》(172頁)という木村に対し、池田は昭和11年10月17日における魯迅との《最後の会見》(241頁)を綴ったことになる。さらに、竹内好「最近の中国文学」も配され、そこでは次のような魯迅への論及がみられる。

魯迅の死は中国文学から支柱を奪つた。作品によつて与へられたものは必ずしも多きに居るとは言へない。重要なのは「狂人日記」の処女作から今日に到るまで、文学者の態度を崩さなかつたことである。彼の言動は矛盾に充ちてゐたが、堕落と陰謀と虚飾とを憎む点では狂気に近いまでに容赦なかつた。「中国のゴルキイ」と呼ばれる彼が、身を以て青年に教へたものは、文学の個々の問題ではなく、転換期に処する文学者の一つの生き方であつたと言へる。(222頁)

ここには、魯迅の中国(文学)および文学者(一般)にとっての存在の大きさがよく示されている。

特集の第三は、特集「魯迅の死を悼む」(『文学案内』昭11・12)である。文学案内編輯部より中国文家協会へ「魯迅を哀悼す」というメッセージにつづき、関係者の追悼コメントが並ぶ。同誌のトーンを集約的に体現した代表的な言表として、次に江口渙「魯迅の死」の一節を引いておく。

中国の偉大なる作家魯迅が死んだ。この七月、マキシム・ゴリキイの死によつて大きな損失を被つた世界文化は、魯迅の死によつて又新しい損失を加へた。事実、彼の死は中国の文壇思想界、並びに労苦大衆にとつても償ひ難い損失であるだけではなく、われわれにとつても、又世界人類にとつても、同じく償ひ難い損失である。(3頁)

ほかに、佐々木孝丸「人民の代弁者」、秋田雨雀「言葉に尽せず」、野上弥生子「五六年後の彼の故国を」、青野季吉「日本に迎へたかつた」、張赫宙「独特の作風」、三好十郎「精神の強烈な美しさ」、藤森成吉「鋭い気魄ある人」が並ぶ。また、特集とは別に、貴司山治「魯迅先生」も同誌同号の掲載である。

総じて、魯迅追悼言説においては、魯迅の死を悼むことにくわえ、文学者、人格者としての相貌が高く評価され、それゆえ中国内外における死の衝撃・影響力の大きさも、広く語られていった。このことは、「魯迅随想」(『現代支那の文化と芸術』松山房、昭14)において、《東洋――支那の作家の一つの型として学者くづれといふ小説家タイプがあり得る》と指摘する一戸務が、魯迅をその代表とみた上で、

《魯迅は文化貢献者》であり《狭義の小説家ではありえなかつた》（139 頁）と評したこととも関わる。

3.『大魯迅全集』刊行に寄せて

魯迅の逝去を受けて、日本では本国・中国に先立ち、『大魯迅全集（全 7 巻）』（改造社、昭 11～12）が刊行されていく。このことに関わって、郁達夫は「今日の中華文学【下】その動向と作品」（『読売新聞』昭 11・12・1）において、《最近物故された魯迅はその文章の鋭利さ、思想の前進してゐる点で、一般に敬服されてゐました》、《併も最後まで変節せず一本気で通してきたこと、文壇切つての人格者であつたことなどその尊敬ある所以でせう》という人物評にくわえ、《今度、日本で魯迅全集が上梓されるさうですが、彼こそ本当の前進作家としてこの一派を代表する人ですから、これが日本で読まれることは大変良いことです》（5 面）と、日本での全集刊行とそれによる魯迅読者の増加を寿いでいた。

はやくは、広告「改造社　大魯迅全集」（『改造』昭 11・12）において、《東洋の大文豪／魯迅の大全集出づ》というコピーにつづき、次のようにして魯迅の業績が顕揚されていた。

> 東洋の生んだ世界的文豪大魯迅の全集出づ！　東洋思想を把握せんとするものは此鬱然たる巨人の全集によるの外なし、彼を知らずして支那の芸術を語るべからず、彼の小説を読まずして真の支那の味ひを語るべからず、彼のエッセイに親しまずしてエッセイのうま味を語ることは出来ない。識高く、筆深く、心魂の剣神に迫る。（頁表記なし）

本格的なプロモーションとしては、広告「改造社版　大魯迅全集　刊行のことば」（『改造』昭 12・3）があり、そこでは版元の意図にくわえ、関係者による推薦の辞が並ぶ。まず版元の紹介文をみてみよう。

> 魯迅は東洋の有するたつた一つの文学的至宝と思はれてゐた。彼の呼吸する世界は民族的の生き苦しい世界であつた。そして、彼は、内にも、外にも、苦しい戦ひを戦ひつづけた。最期の息を引きとる刹那までその戦ひの気構へをくづさなかつた。そして芸術家の進むべき道、守るべき道、人間としての居るべき道をも踏み外づさなかつた。彼の遺した小説、随筆、散文詩等々のすべてが、そしてその僅か一、二頁のものさへ、読む人の、胸へ、頭へ、一つの手ごたへのあるものばかりだ。噛みしむれば、噛みしむるほど、いよ／＼奥深い東洋的の味を放出する。そしてこの人の深さと、芸術品としての高さが、現代のあらゆるレベルに超絶する。／此の人の全集でわれ／＼は支那民族のほんたうの特質を摑むことができ、そして、その利刃のごとき筆力で、複雑な隣邦の現象と心理とをスツキリと我々の胸へ入れてくれる。／我社と魯迅とは縁故が深かつた。彼死んで彼の門下及び魯迅の人と芸術の前古に類ひなきを仰慕する、我国の文壇人とが相寄つて、一ついい全集を出さうと云ふことになつた。我社はその提議を諒としてそれ等の人々と相協戮して大衆の期待に背かぬ完璧な全集を刊行したい。全く東洋民族のあらゆる精神の糧と云ふ意味のもとに。そして汲めども尽きぬ彼の深い芸術を味ふ意味に於て。（245 頁）

ここでは、まず、魯迅は（中国ではなく）東洋の文学者としてその芸術性を顕揚され、ついで、民族性を保持し、多様なジャンルで文筆活動を行った人格者としても称揚される。さらに、日本の読者の立場からは、魯迅を読むことは《支那民族のほんたうの特質》を理解することにもつながるという。

つづいてこの広告には、「大魯迅全集全七巻内容」が掲載されている。編集顧問として、茅盾、許景宋、胡風、内山完造、佐藤春夫の 5 氏が並び、以下、各巻の収録ジャンル、訳者、概要が記載されていく。

第一巻　小説集／井上紅梅・松枝茂夫・山上正義・増田渉・佐藤春夫訳
第二巻　散文詩・回憶記・歴史小説／鹿地亘・松枝茂夫・井上紅梅・増田渉・佐藤春夫訳
第三・四・五巻　随筆・雑感集／鹿地亘・日高清磨瑳訳
第六巻　文学史研究／増田渉・松枝茂夫訳
第七巻　書簡・日記／小田嶽夫・鹿地亘訳〔ここでは長文のため概要を省略する〕

さらに、「魯迅の偉大性につき」という総題のもと推薦コメントが掲載されている。宋慶齢「魯迅先生の戦績を日本人民に献ず」には、《私は信ずる、彼の著作の紹介に依つて、日本の思想界は、中華民族を最もよく理解することが出来、日支両国の勤労人民が、一層の理解と結合とに到達するであらうこ

とを》（249 頁）とあり、魯迅を読むことの実利が説かれている。《支那の新文学運動有つて以来、誰れが一番偉大で、誰れが最もよく此の時代を代表し得るかと聞かれゝば、私は躊躇なく、魯迅だと即答する》という「魯迅の偉大」の郁達夫も、《支那の全的民族精神を瞭解せむとする者は魯迅全集を読むより外、捷径無からうと思ふ》（249 頁）と、やはり魯迅を読むことを中国理解の鍵と位置づけていく。《魯迅先生の全集が日本に翻訳出版されることは、一九三七年東亜文化界の一大慶事である》と、『大魯迅全集』の意義を高く評価する「精神の糧」の茅盾は、《現代中国に於て、彼くらゐ中国民族性を深刻に理解し得たものはなく、また彼くらゐ中国民衆の熱愛と擁護とを受けた者はない》（249 頁）と、中国精神／民衆のエッセンスとして魯迅を位置づけてみせる。つづいて、岡邦雄「社会的にして国際的な文学」を次に引く。

> 生前彼が、その思想に於て、生活態度に於て、歴史的な動きを社会と共にしてゐた。その人は死んだが、社会は不死である。そこで死ぬべき個人の文学、思想が不死なる社会の文学、思想となつて生きる、従つてその人が生きるのである。そして魯迅の如きは、まさにかういふ型に属する文学者であつた。／魯迅の如き社会的な文学は、また当然同時に国際的でもある。日本と中国との関係はずいぶん困難なものになつてゐるらしい。しかしそれは一部局のことであつて、日中両国民の間には単に従来の「同種同文の民」といふ以上の親しい協同感が、今や新しく、広汎にひろがりつゝあるのだ。（250 頁）

ここで岡は、日中両国（民）にまたがって大きな影響力をもった魯迅を、現在の日中関係に対置するようにして価値づけている。文学的評価に及ぶ、佐藤春夫「編集者としての言葉」も次に引く。

> 自分は残念ながら魯迅の人と芸術とを最もよく理解すると言ひ切ることは出来ない。但、それらを最も深く愛し高く評価する一事は自ら疑はない。彼の文学は要するにヒユーマニテイの文学である。彼はあまりに深く愛するがために屢々憎んだ。故にその憎みは大丈夫が則天去私のものであつた。そのなつかしいリアリズムとそのほがらかなニヒリズムとは水到成渠と道破した東洋人独自のものである。我等はこの清水によつて西欧的なものからあまりに多く荼毒された我等のはらわたを洗ひ、豁然たる大丈夫の心魂に触れてせゝつこましい社会認識や、低劣な日常生活的心情から解放されて、真実な人類相互の愛に目覚めるのが次の文明への正しい出発であると信ずる。魯迅全集は正にこの第一教材である。（251 頁）

図 1：『改造』昭和 12 年 4 月号

こうして佐藤は、東洋的なものと西洋的なものを止揚した高みに、魯迅による《ヒユーマニテイの文学》を位置づける。いずれも、文学、人物の両面から、魯迅の偉大さを顕揚する言表が並んでいる。広告「改造社　大魯迅全集」（『改造』昭 12・4）には、《彼の小説・随筆・感想を読まないでは支那を語れぬ》、《東洋第一人の小説随筆を読め！》、《読めば読むほど滋味の出るのは魯迅の小説だ !!》（頁表記なし）といったコピーが踊る。こうした『大魯迅全集』については、日本の文学者による批評も言表されていく。島木健作「「大魯迅全集」を読む」（『文芸』昭 12・4）には、次のような評言がみられる。

> 私が彼に求めそして彼が間違ひもなく与へてくれるものは〔小説の書き方より〕もつと大きなものだ。私は彼の人格に薫染せられることを欲してゐる。この偉大な人物の謦咳に日夜接してゐるうちにしだいに自分の人間が高められることを願つてゐる。そのやうなことが期待できる文学者といふものは世界を眺めまはして見ても現代には必ずしも多いとはいへない。〔略〕彼にあつては文学は「たゞその力量を利用して社会を改良しようと考へた」ところのものであり、始めから所謂「人生の為め」の文

大魯迅全集

支那は世界の偉大な謎
此謎を解く鍵はたゞ大
魯迅全集あるのみだ!!

編輯顧問 茅盾・許景宋・胡風
内山完造・佐藤春夫

編輯 胡風・鹿地亘・日高清磨雄
執筆者 増田渉・小田嶽夫・松枝茂夫
井上紅梅・山上正義・佐藤春夫

第一回配本 お申込順により明後日より配本開始

第小說集 卷一

魯迅は東洋の有するたつた一つの文學的至寶と思はれてゐた。彼の呼吸する世界は民族的の生き苦しい世界であつた。そして、彼は、内にも、外にも、苦しい戰ひを戰ひつづけた。最後の息を引きとる刹那までその戰ひの氣構へをくづさなかつた。そして藝術家の進むべき道、守るべき道、人間として居るべき道をも踏み外づさなかつた。彼の遺した小說、隨筆、散文詩等々のすべてが、そしてその僅か一、二頁のものさへ、讀む人の、胸へ、頭へ、一つの手ごたへのあるものばかりだ。噛みしめれば、噛みしむほど、いよ／＼奥深い東洋的の味を放出する。そしてこの人の深さと、藝術品としての高さが、現代のあらゆるレベルに超絶する。

此の全集でわれ／＼は支那民族のほんたうの特質を摑むことができ、そして、その利刃のごとき筆力で、複雜な隣邦の現象と心理とをスツキリと我々の胸へ入れてくれる。全く本全集は東洋民族のあらゆる精神の樣であり、そして汲めども盡きぬ藝術の深い泉だ。

改造社 東京市麹町区飯田町 振替東京 二〇四八

全集七卷 約束募集（要不金込申）

定價 一卷 一圓 二卷 一圓 三卷 一圓

第一卷 小說集 內容 一、吶喊 二、彷徨 三、短篇

▼無類の同時代的古典 佐藤春夫

▼近代支那の文壇をして世界に宣からしむ 藤森成吉

▼精神の糧 茅盾

図 2：『東京朝日新聞』昭和 12 年 2 月 12 日

学に志したと自ら言つてゐる。私も最初から自分の文学をそのやうなものたらしめやうとしてゐる。私が魯迅に血縁を感じ彼を師と仰がうとするのは自然なのである。（184 頁）

こうして、転向作家の島木は自らの文学的信条の先達として魯迅を位置づけ、その関係性の近さを《血縁》とさえ称している。同誌同号には、つづいて林芙美子「魯迅追憶」も掲載され、《日本の鷗外が後世に残る作家であるやうに、魯迅氏もまたそのやうに偉大な作家である》、《東洋に此の様な作家を持つてゐると云ふことは私達の幸福であり、大きな名誉だと思ふ》（186 頁）という絶賛の辞が読まれる。ほかに、中村地平も「文芸時評」（『日本浪曼派』昭 12･7）に「魯迅愛読」という小見出しを立てて、《改造社版「大魯迅全集」第一巻を通読したが、最近読んだだもののなかで、最も教へられるところの多い作品集であつた》として、まずは魯迅作品の《殆んど全部に「死」が取り扱つてある》ことに注目し、《作品の底に沈んでゐる「生」の概念は、まるで骨のやうに鋭い》、《真実の意味に於る不安の文学とは将にかういふものをいふ》（40 頁）と、高い文学的評価を示した。さらに、中村は次のように言表していく。

> 魯迅の人や作品に就ての細かな解析は、既に多くの適当者によつて紹介されてあるが、定評ある「阿Q正伝」は別として、僕にはゴオゴリ的な諷示的作品よりか、「孤独者」の系列に属する自伝的・私小説傾向の作品の方が感銘がふかかつた。〔略〕就中「家鴨の喜劇」のごときは、原稿紙十枚に足りない位ゐの短章に過ぎないけれど、僕は東洋浪曼派の絶品である、と思ふ。（41 頁）

ここで中村は、魯迅（作品）を《東洋浪曼派》に位置づけ、《絶品》とまで絶讃している。

広告も後追いするように、『大魯迅全集』の魅力を喧伝していく（図 2 参照）。

しかもそこでは、広告「改造社　大魯迅全集」（『東京朝日新聞』昭 12・2・12）に大書されたように、《支那は世界の偉大な謎此謎を解く鍵はたゞ大魯迅全集あるのみだ !! 》という利用価値が付される。さらには、同広告においては、次にようにして『大魯迅全集』の有用性が重ねて言表されていく。

> 此の全集でわれ／＼は支那民衆のほんたうの特質を摑むことができ、そして、その利刃のごとき筆力で、複雑な隣邦の現象と心理とをスツキリと我々の胸へ入れてくれる。全く本全集は東洋民族のあらゆる精神の様であり、そして汲めども尽きぬ芸術の深い泉だ。（1 面）

こうして魯迅（全集）は、その広告言説を通じて、日本人にとって難問である中国理解の鍵と位置づけられ、それでいて同時に、東洋（文学）のエッセンスを包含する、高い芸術性が承認されていった。

4. 昭和 10 年代半ば以降の展開

昭和 10 年代半ばの魯迅紹介をリードしたキーマンは、小田嶽夫である。魯迅の死後、小田は伝記として「魯迅の文学生活――年代記的スケッチ――」(『新潮』昭 11･12) を、創作として「飄泊の魯迅」(『文芸春秋』昭 13･7) を発表したほか、「魯迅伝 (第一回)」(『新風』昭 15･6)、「魯迅伝 (第一～三回)」(『新潮』昭 15・9～11) をベースに、『魯迅伝』(筑摩書房、昭 16) を上梓した。同書は、中野重治「小田嶽夫著“魯迅伝”」(『読売新聞』昭 16・5・28) において、《小田氏は、魯迅の仕事と生涯とに、愛と同情、理解と尊敬とを以てそれを描いてゐる》、《この四、五年来、日本では人の伝記を小説にすることが流行つたが、この“魯迅伝”はそんなものではない》、《真面目な伝記である》と紹介された。さらに中野は、日中戦争下における日本で『魯迅伝』を読む意義を、次のように強調していた。

> 事変解決の内面に、もし中国々民の品性及びその改造の問題が含まれるとすれば、尨大な魯迅を読みかへす傍ら、差当りこの“魯迅伝”を再読三読することなどが、文学にたづさはる者は勿論、もつと広い読者にとつても必要であらうと思ふ所以である。(5 面)

その一方、中国文学に対する異国趣味的な視線や諜報の一環としての興味については、矢崎弾が「録音版 「満鮮文学」への自戒」(『読売新聞』昭 15・5・1) で、次のように釘を刺す場面もあった。

> 事変前、魯迅の翻訳など機縁に中国文学に対する日本文壇のかなり切迫した注目があつた。その時、中国作家のひとりは、日本文壇のときならぬ好奇心に鋭い諷刺の言葉を投げかう云つた。「我々の微力な文学が日本作家のお眼にとまつたのは光栄の至りだが、真珠買ひの白人の旦那が南洋のくろんぼの踊子をものめづらしさうに眺める様な空気には辟易する。」この言葉はもはや死語であるか私は疑問である。(5 面)

前節でも検証した通り、『大魯迅全集』の売り方にもこうした含みは明らかだったが、少なくとも魯迅については、その後も回想記が書きつがれる[4] など、人物としての魅力もまた大きかった。

伝記としても、香坂順一「魯迅と支那」(『南邦経済』昭 18・7) がくわわり、柴田錬三郎は「魯迅幼年記」(『三田文学』昭 15・5) と題して、魯迅『朝花夕拾』によった、しかし《あくまで小説》(「あとがき」『南方のうた』泰東書道院出版部、昭 17) を発表したほか、「文学の勝利と敗北――魯迅と芥川龍之介――」(『三田文学』昭 17・4) と題した評論で、2 人の文学者を比較している。

また、竹内好は「魯迅の矛盾」(『文学界』昭 18・10) において、《啓蒙主義者魯迅と、小児に近い純粋な文学を信じた魯迅の二律背反的な同時的存在》を指摘し、それを魯迅の《本質的矛盾》と捉え、さらに中国文学全体へと視野を広げ、次のように論じていく。

> この二者は、恐らく魯迅にも気付かれずに、不調和のままにお互ひを傷けあはなかつた。がそれは彼が、周作人や胡適ほども思想家でなかつたからである。この魯迅の矛盾は、魯迅に表現された意味で、現代支那文学の矛盾である。何故ならば、彼は論争を通じて支那文学から自己を選び出していつたが、そのことによつて彼自身が支那の近代文学の伝統となつたからである。魯迅と支那文学とは、お互ひに対極に立ちながら、全体としてはそのままに支那文学であり魯迅であつた。(37 頁)

こうした竹内の魯迅観は、この後、評論『魯迅』(日本評論社、昭 19) へと結実していくだろう。

竹内好『魯迅』と既出の小田嶽夫『魯迅伝』に関わっては、前後する時期に太宰治が小説として『惜別　医学生の頃の魯迅』(朝日新聞社、昭 20) を書くことにもなる。こうした昭和 10 年代後半の魯迅受容の、特異とも称すべき動向 (刊行ラッシュ) については、別稿にて改めて論じる課題としたい。

※本論文は 2019 年度神奈川大学アジア研究センター個別研究 (奨励) 助成金の成果である。

(まつもと　かつや　所員　神奈川大学外国語学部教授)

4　杉本勇乗「魯迅さんと道」(『詩と美術』昭 14・11)、高良富子「魯迅に逢ひし頃」(『大陸』昭 16・2)、澤村幸夫「魯迅を懐ふ」(『満蒙』昭 17・1) ほか。